

# 埼玉の夜明け

巻号 43  
第2号  
第134号  
通算

団区会  
教地員  
スト玉員  
リ区委  
キ教会  
本東社  
日関社

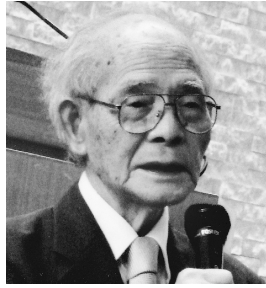
二〇一二年八月二十五日大宮教会で行われました「平和を求めぬ八・一五集会」において、沖繩教区の金城重明牧師による「強制集団死からキリストに生かされて」との講演をお聞きしました。以下はその内容の概略です。先生は八〇歳を超えて居られますが、お元気に御自身の凄惨な御体験から「平和」を訴えられました。

埼玉地区社会委員会 本間 一秀

## 講演

### 強制集団死から キリストに生かされて

沖繩教区牧師 金城 重明



#### 一、沖繩戦の実態

米軍の座間味島、慶留間島への上陸は一九四五年三月二六日、渡嘉敷島への上陸は三月二七日、そして沖繩本島への上陸は一九四五年四月一日であった。それからさ

らに激しい戦争に沖繩は巻き込まれた。

米軍は五〇万人余の軍勢を沖繩に派遣した。米軍艦一四〇〇隻。それに対して日本軍は九万余、それに防衛隊、学徒隊を含め一万人。沖繩本島は、艦砲射撃や空爆によって原型を失った。六月二三日に牛島満司令官と長勇参謀長は自決し、沖繩戦の組織的戦争が終わり実質敗北した。

一九四五年（昭和二〇年）二月の時点で、国の要人が昭和天皇に

対して、太平洋戦争の終結を進行したが、「もう一度戦果を挙げてからでなければ」と認めようとはしなかった。この時、その進言を受け入れていけば、沖繩戦における二〇万人余の犠牲者（沖繩では住民の二五%が喪失）は出なかったはずである。

終戦後、沖繩は米軍統治下に置かれた。沖繩は本土復帰を果たした現在でも、独立国でありながら、敗戦後六七年間も他国に基地を提供している。このような国は世界戦争史上例がない。日本は平和憲法を持ち、アメリカと「友好国」と言いながらこの状況である。沖繩戦により二〇万人余の尊い命が失われたが、結局、沖繩戦は本土防衛、天皇制（国体）の為の捨石作戦とされた形であり、玉砕戦であったと言える。

#### 二、強制集団死の発生

慶良間三島での、「強制集団死」は日本軍が駐留した島だけで起きた。座間味、慶留間、渡嘉敷の三島での犠牲者は約六〇〇名にも上った。日本軍の沖繩に対するキーワードは「軍・官・民、共生共死」。つまり、軍と共に生き死ぬことであった。このことは一般的なスローガンではなかった。しかし、日本軍は「共に生き、共に死ぬ」という考えはなかった。私

が赤松海上挺身隊長と会った時は「我々軍隊は慶良間の戦況を本部に伝える為に生き延びなければならぬ」と言っていた。この証言は、まさにそれを物語っている。私は、やはり日本軍の本当の考え方はここにあったのかと思えた。

座間味島と慶留間島への上陸と強制集団死は三月二六日であった。私の住む渡嘉敷島では三月二七日に米軍が上陸、そして日本軍が住民に対し、「北山（にしま）沖繩ではこのように言う。」の日本軍陣地への移動」との避難命令が出された。私は、非戦闘員がなぜ危険な軍隊の近くに移動させられるのか疑問に思ったが、日本軍に対しては絶対的な服従が強要されていたので住民は従った。私たち家族は、村民達と激しい砲弾と豪雨の中、怯えながら移動した。

翌二八日朝、村長の下に終結させられた。隊長による自決命令が防衛隊によって村長に伝えられた。六〇〇人から七〇〇人の村民の前で、村長は「天皇陛下万歳」と三唱した。その時「死ぬこと」と分かった。住民に軍から手榴弾が配られた。非戦闘員に武器を渡すことは禁じられていたが、そのことが為されたことは、日本軍が重大な決断を下した証である。集団自決は軍命、すなわち天皇陛下の命令によるものであり、個人

的なものではない。

世界戦争史上類を見ない惨劇、強制集団死が起きた。住民たちは死を覚悟し、殺し合い（殺意無き殺人）が始まった。私と兄の二人で、母、弟、妹に手をかけた。当時一六歳の私は悲痛のあまり号泣した。そして、生き残った兄と私で死の順番を話し合っている時、一人の少年が「どうせ死ぬのだから米軍に斬り込んで死のう」と話を持ちかけてきた。私達、少年少女数人は「米軍への斬り込み」を覚悟して、惨劇の場を後にした。

米軍を探し、あても無く歩いてみると、最初に日本兵に遭遇して衝撃を受けた。「なぜ自分たちだけがこんな目に」と、日本軍への不信感、怒りが込み上げてきた。さらに、他の多くの生き残りの住民がいる事を知らされて二重の衝撃を受けた。

米軍に保護され、次第に「強制集団死」という異常な心理状態から正常な状態へ解放されることで、内的苦悩は増幅されるばかりであった。

#### 三、戦後の苦しみからキリスト教信仰に導かれる

戦後、精神的絶望と死の淵を彷徨っていた時に、引き揚げ者のキリスト者棚原氏と出会い、初めて聖書と讃美歌を目にした。同氏に

聖書を読む事を勧められ、通読しながら、聖書が不思議な書物だ  
なあって、と食い入るように読ん  
だ。罪と救い、生と死、愛と永遠  
の命、等に目を開かされた。導か  
れた当初は毎週、棚原氏を囲み勉  
強会をしていたが、一九四八年に  
与那城勇糸満教会牧師が伝道で来  
島され、それがきっかけで洗礼を  
決意した。強制集団死の苦悩か  
ら、洗礼という、人間が生まれ変  
わる聖なる儀式を受け、キリスト  
者として、人生の第一歩を踏み出  
す為に島を出た。キリスト教は、

私の戦後の出発点、原点となつた  
のである。

四、モルトマン博士との出会い  
世界的に著名な神学者モルトマ  
ン博士が沖繩に招聘されたのは、  
二〇〇三年四月の事であった。モ  
ルトマン博士は、「苦しんだのは  
キリストだけでなく、神もキリス  
トを十字架にかける事によって神  
も苦しまれた」と明言している。  
神が苦しむとの神学思想に深い感  
銘を受けた。私は強制集団死の苦  
悩を忘れたいとの内的戦いが生じ

た時に、それを前向きに受け止め  
る信仰が与えられた。強制集団死  
を個人の内的問題、過去の出来事  
として受け止めるのではなく、  
「自分が今どう生きるのか」と言  
う課題として考えるようになった。  
六七年前に強制集団死から生  
かされた私にとって、平和を実現  
する事は、残る生涯の最大の課題  
である。

五、私の「沖繩戦・強制集団  
死」に対する罪責告白  
一九四五年三月二八日の渡嘉敷

島での強制集団死体験は、私に  
とって生き地獄の恐怖と絶望その  
ものであった。戦後は何十年もそ  
の苦悩の虜になったが、主イエ  
ス・キリストの罪人の贖いの為の  
十字架の苦しみによって、その苦  
悩が信仰的に軽減される事が多  
かった。私は自身の内的葛藤を、  
信仰の戦いの問題として、認識す  
るようになった。

しかし、あの恐るべき強制集団  
死は、信仰の内面に閉じ込めてお  
くべき出来事ではなくて、戦争と  
いう歴史的現実で生じた悲劇  
だったのである。英語では歴史を  
historyという。しかし、  
歴史はヒストリア(物語)より  
も、ドイツ語のゲシヒテ(Ges  
chichte)即ち「出来事」  
として強く認識するようになった。

を軽減された。  
そこには十字架の主イエス・キ  
リストの深い愛があった。モルト  
マン博士の神学「希望の神学」と  
の出会いがあった。安らぎを得ら  
れたものと思われる。

しかし、「あの恐るべき強制集  
団死は、信仰の内面に閉じ込めて  
おくべき出来事ではなく」との思  
いで、牧師として、神学者、神学  
教師として、悩みながらもご自身  
を証しされて来られた。家永三郎  
氏の教科書裁判の法廷において  
も、「集団自決」の証人として立  
たれた。

主張

伝道、伝道と呼ばるる人の声。  
「教会には笑いが少ない。もっと  
笑う教会にならねばならぬ。と  
にかく笑おう。」と対象もないのに笑う練習をと狂  
言師よろしく会衆に笑いを要求する。面白くなく  
てもともかく笑ってみるとなぜだかそのうち本當  
に笑えてくるという。これを『伝道体操』と称す  
るそうだ。

「伝道する教会」を標榜して教勢を拡大してい  
る教会をよく観察してみると、その伝道方法には  
問題視すべきものがある。なかには「カルト化し  
た教会」として裁判に提訴されたり、教団窓口  
に相談が寄せられたりする。主イエスはそんな  
「伝道」をされたのだろうか。また望んでおられる  
だろうか、はなはだ疑問である。私たちの伝道は  
どこまでも主イエスの御足の跡を辿るものであり  
たいのだが。

この九月三日世界基督教統一神霊協会教祖文鮮

明が死去し、一五日には盛大な葬儀が行われた。  
教義の要諦は聖書を手前勝手に解釈し、イエスの  
救済では不完全なので自分との性的な関係によつ  
て新生しなければ原罪が拭えないとするものだ。  
傍系異端『摂理』の教祖鄭明析は自らとの性行為  
を「救済」と信じこませ多数の女性を犯してきた。  
目下目覚めた被害者の訴えにより刑罰に服してい  
るが、釈放後は同教義に惑わされる婦女子の貞操  
を更に奪い続けるであろう。主イエスの御名が汚  
されているのだ。私たちは何をもち「救い」と  
して信じているのか、信仰の対象の真正性は伝道  
方法の適切性と不可分ではないのか。他人事では  
ない。対象もないのにただ「笑う」ことが伝道だ  
と冗談でも言うべきはなからう。「新天地イエス教  
証拠帳幕聖殿」(通称新天地)は李萬熙を再臨主と  
して教会乗っ取り手法で韓国では大問題となつた。  
年三千人教勢を拡大しているという。

「第二次大戦下における日本基  
督教団の責任についての告白」  
(一九六七・九一一)に学びつつ、  
私は、主イエス・キリストの御名  
によって「沖繩戦・強制集団死」  
に対する罪責を告白するものであ  
る。

結 び

以上が御講演の内容である。金  
城先生はあの恐るべき「強制集団  
死」の心の苦しみを信仰の戦いの  
問題として認識され、その苦しみ

「あの日に死んだ人達のため、  
あのような悲劇を絶対に繰り返さ  
ないために、『集団自決』の真  
相を一生語り続けて行こうと決心  
した」と著書、「集団自決を心に  
刻んで」に記されている。  
金城先生の御講演をお聞きした  
今、私達は何を為すべきか?当然  
「罪責告白」があつて然るべきで  
ある。沖繩との合同のとらえ直  
し、基地問題。真摯に取り組みた  
いものである。



## 八・一五集会 講演を聞いて

埼玉和光教会 安永 直美

八月一五日、一一〇名の大勢の方がこの重い大きなテーマ「強制集団死からキリストに生かされて」について、講師の金城重明牧師の熱のこもったお話しに耳を傾けました。先生は八三歳というご高齢にもかかわらず、終始淀むことなくご自身の沖繩戦での体験(当時十六歳)を私たちに語られました。

戦後六七年を経た今日も、尚決して忘れ去ることの出来ない沖繩戦での「集団自決」という、辛く悲しい体験を語り部として、息子さんと共に埼玉の地まで赴いて下さり、講演をして頂いた事に心から感謝を申し上げたいと思いません。

著書「集団自決を心に刻んで」が幸いにも入手でき、講演を聞き漏らした部分や理解力不足の私にも、当時の悲惨な状況が伝わってきました。

沖繩戦の悲劇の象徴というべき「集団自決」は、明治以来の国家が施した皇民化教育を抜きにしては、その真相を把握することがで

きません、と初めに書かれています。

また、先生ご自身は渡嘉敷島の「集団自決」の生き残りの一人として、その体験の重みを身に負いながら生き延びてこられました。

自らが生き延びた事に絶望し、戦後の苦悩の中から信仰に導かれた、とのこと。自分はキリストの愛に包まれ、神の愛ゆえに自分の「集団自決」の苦しみから解放され、救い主イエス・キリストの愛によって信仰に結びついたと語られました。その後、沖繩キリスト教短期大学の創設に尽力され、一九九四年まで教育に携わられました。

未だに日本全国にある米国基地の七五%が沖繩に集中しているという現実と、軍事基地を七〇年近くも他国に提供している国はどこにもないことを力説されました。私たちは武器を持つのではなく、再び戦争はしてはいけないと言いつつ、と結ばれました。

沖繩の教会が祈り続けてきたように、私たちも共に祈り続けたいと強く思わされた八・一五集会でした。

## 関東教区 社会活動協議会報告

和戸教会 後藤 龍男

開催日時：二〇一二年九月一六日

(日)〜一七日(月・祝日)

会場：磯部ガーデン(群馬県安中 中市磯部)

テーマ：森は海の恋人〜人の心に

木を植える

講師：畠山重篤(はたけやま しげあつ)さん(「牡蠣の森を慕う会」代表、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授、日本バプテスト同盟気仙沼教会会員)

今回は各地区持ち回り制で群馬地区が担当となり、企画・準備を進めてきました。講師の畠山さんは一九四三年中国・上海生まれ。宮城県気仙沼湾でカキ・ホタテの養殖業を営む漁師であり、先の東日本大震災でこれまで養殖で使用していた養殖いかだ、船、車両、作業場、加工場、冷蔵庫、製氷機など一切を津波で失ってしまったということでした。金額にすると二億円に上るとのことです。そして当時九三歳のお母様が津波に巻き込まれて亡くなりました。これまで家業のかたわら豊かな

海を取り戻すために、一九八九年から「森は海の恋人」を合言葉に、気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根山への広葉樹の植林活動を続けており、海には子供たちを招き、体験学習を続け、これまで参加者は一万人を超えているということで

私は漁業と山の森林とどんな関係があるのかと思っていました。講師の話聞いて分かったよな気がしました。カキの産地は、川の水が海に注ぎ込む場所があり、川が汚れ、山が荒れたりすると海でカキが育たなくなるのだそうです。森を豊かにすれば、海もよみがえることが経験的に分かったので気仙沼湾に注ぎ込む大川流域の山に木を植え始めたのだそうです。カキの餌であるプランクトンは海が汚れたり、川の流域がせき止められたりすると繁殖がうまくいけなくなり、カキも育たないということです。今、日本の山には戦後植えられた杉の木が多く、間伐が進めば、森に光が入り養分が蓄えられ、やがてそれが川に流れ込んで海を豊かにするのではないかという強い確信を持って漁師である畠山さんが森林に特段の関心を持って植林活動をしていることを知ることが出来ました。

巨大な水門や堤防で山や湿地と切り離されてしまえば、豊かな海が失われてしまうのではないかと心配しています。震災後海辺から生き物の姿が消えてしまい、「海は死んだ」と思ったそうですが、今水が少しずつ澄んできて生物が増え始めたそうです。この活動の原点はご自分がキリスト者であることにも起因しているのではないかと話していました。国際森林フォーラム(U N F F)が森林の育成や林業の健全な発展などに貢献した人物に対して表彰する「フォレスト・ヒーローズ」(森の英雄)を二〇一二年受賞されたとのこと。世界で五人の一人に選ばれたとのこと。畠山さんの活動範囲は広く精力的に活動している様子も知ることが出来ました。

天地創造の世界から完全に調和を失ってしまった今の世界に生きる私たちに問いかける貴重な学びの時であったと思います。今回は群馬地区壮年部の参加を得てこれまでにない参加者数を与えられました。一六日には九七名、一七日には百一六名の参加があったそうです。埼玉地区からは名簿によると一八名で社会委員会からは本間先生、岡村先生、後藤の三名が参加しました。 Ω

# 震災被災地一年半

井上 雅雄

八月東北に行く機会があり震災被災一年半後の四地区を回った。当日震度三の地震が起こった。

時間とともに関心の薄れる一方で、多くの人々の命が失われ、塩水がたまり、家の土台だけ残り復興の進まない、壊滅した町の風景に深い悲しみを覚えた。

大船渡は海岸沿いは少し壊れた家が見られるが、国道から見る限り、地震・津波による被害は表面的には少なく、造船所も稼働していた。国道沿いには、建て直された大船渡教会がある。

一山を越えて入った陸前高田の町は市内に近づくにつれて仮設住宅が目立ち、海拔〇〜一五mは完全に壊滅し、津波の爪あとの恐ろしさを見せられた。わずかに数軒のプレハブ商店と、山手の国道沿いに建て直したガソリンスタンドもひっそりとしていた。海岸に近い高台で水産会社が再開しているが、人の姿はなく、一本の松の木だけがさびしく生きている。気仙沼は、海岸の道路横には大型船が陸揚げされ、船着場付近四

km四方は、住宅の基礎コンクリート部に今も海水が溜まっている。わずかに一〇軒ほどの飲食店、みやげ物店が客集めをして、全国のボランティアの励ましを受けて自力で復興に向けて動きだした。港から離れた地や高台の地区は被害も少なく、一応正常な生活風景であり、この町だけは復興できそうに思われる。

次の南三陸町も峠を下るにつれて、仮設住宅が点在し、町の入り口広場には数百台の無残な自動車や消防車の残骸が積み上げられ、無残な姿であり、津波のすごさを見せつけられた。海岸横の四階建ての建物の残骸と、志津川病院、高校の残骸があり、戦火の後のように映った。数件の仮設市場があり、動き始めたが、古い住宅が山中にあるだけで、ここに町があったとは思えない。まさに壊滅状態である。

今回見てきた被災地には一〇兆円の復興予算がついているものの、当分、復興はむずかしい。その理由は①海岸線は一五mまで海水が上がり、通常の建物は塩害による腐食で建築は難しい。②当地は今後も大きな地震と津波による

被害発生の可能性が高い。③阪神地震と異なり、仙台から遠く、雇用の場がなくなった。④JR気仙沼線は駅や鉄橋が壊れて復旧は難しく足はバスのみである。政府はミャンマーへ八〇〇〇億支出に加えて、水面下で三〇〇〇億円の円借款を総理の独断で反古にした。一・一兆円あれば四万戸の家が建つ。現地の悲しみは切り捨てられ、政治家と官僚の面子で、増税税金ばら撒きによる、自己保全に走っている。この人たちには人の苦しみなど知る必要がないのだ。

原発は人災であり、白血病の児童増加は否めない。神不在の傲慢な近代科学の罪である。教団も被災A教会を、B教区単位で支える方式をとることで、支える祈りも強くなるであろう。来夏も東北に行くと神が言われる。

## 社会委員会報告

◎環境問題講演会

日時：七月一六日(月・休)

一〇時〜一五時半

場所：大宮教会

主催：関東教区宣教総合協議会

共催：埼玉地区社会委員会

主題：「農を守る・子どもを守る」

講師：荒川朋子さん(アジア学院副校長)

同：片岡輝美さん(会津放射線情報センター代表)

参加人数：八四名、四五教会

六分団に分かれて参加者同士の話し合い

(希望者のみ)

一四時一〇分〜一四時一〇分

全体会・分かち合い(会堂)

一四時一〇分〜一五時二〇分

◎平和を求める八・一五集会

日時：八月一五日(水)

一〇時〜一二時

場所：大宮教会

講演：「強制集団死からキリストに生かされて」

講師：金城重明牧師(沖繩教区)

参加人数：一一〇名 四六教会

講師と懇談会：一三時三〇分〜

一五時(一階会議室) 参加人数：三五名(希望者) (地区ホームページにも掲載しています)

◎第二回社会活動委員会

日時：一〇月二一日(日)

三時〜五時

場所：上尾合同教会

出席者 一一名

・奨励：本間牧師

・各教会の活動報告

引き続き

◎第四回社会委員会 五時〜七時

出席者六名

・各小委員会報告

・二・一一集会開催について協議

・会計状況について

## 編集後記

大飯原発再稼働に対する反対の声は約八割に達しただろうか。それを受け、野田政権は二〇三〇年代の原子力エネルギー依存をゼロと発言、ところが横槍が入るとすぐに曖昧な表現となってしまう。今後どうなっていくのだろうか。今は全く不透明だ。原発事故は国民生活に大被害をもたらした。それを受けての民意も受け止められないとは…… (浅子)